サウーデ教会女性部会報

２０１６年　８月　　Nº　２８５

もくじ

●巻頭言　「神の救い」　丹羽昭男師　ページ (2)
●あかし
「食前の祈り」　平尾洋子 (5)
「神に恵まれた旅行」　藤木耐子 (6)
「祈りに応え給う主」　宮谷テル子 (8)
「主の御許に」　畠中美恵子 (9)
●ちょっと立ちばなし　片山美枝子・鈴木弘子 (10)
阿部カルメン (12)
●みことばの小箱　中山輝子／喜納光枝 (13)
●短歌　崎山美知子 (14)
●キリストかおる童謡　「赤とんぼ」　長谷川美代枝 (14)
●個人消息／おしらせ (16)

巻頭言

「神の救い」

テトス　２章１１～１５節

丹羽昭男師

［1］序論

私たちに与えられている「救い」が、いかに大きく深いものであるか、ということを見ていこう。そして、与えてくださった神に感謝しよう。

［2］神の救い

（1）その対象

神は一体、誰を救われるのか。それは「全ての人」である。特別な人だけ、一部の人だけを救うのではない。人種、年齢、地位、貧富の差別はない。全ての人である。その中に「あなた」も含まれている。

（2）その動機

では、神はどうして全ての人を救われるのか。正しい人や立派な人を救われるのは分かる。でも、分からないのは悪を行っている人をどうして救われるのか。それは、神の愛、あわれみ、恵みである。神は愛である。だから、人が滅びていくことを黙って見ておられない。何としても救い出されようとされる。

（3）あらわれた

神の愛は目に見える形であらわされた。神の愛

は御子キリストを通してあらわされた。神の御子が人間として来てくださった。そして、全人類の罪のために御子キリストは十字架につけられた。

ここに神の最大の愛があらわされた。

[3] 個人的救い

(1) 贖い（過去）

神の愛は、御子キリストの十字架の上にあらわされた。そこに全人類の罪を救うという神の御業は完成した。しかし、その救いは私たち一人一人のうちに実現しなければならない。その為にどうすれば良いのか。それは、主キリストを私の救い主として信じて心に迎え入れることである。その時に２０００年前に主キリストによって成された救いが、今、私たちの中に実現する。そして、過去のすべての罪が赦される。神の子とされ、新しく生まれ変わる。霊の誕生日である。

(2) きよい生活（現在）

(1) 捨てるもの

神の子とされた者は、神の子として生き続ける。主キリストを信じる前と同じ生活をすることは出来ない。それまでに大切にしていたものや人、そして、自分自身も捨てる。神に目を向け、主キリストに喜ばれるように生きることである。

(2) きよい生活

そして、きよい神の御前にきよい生活をすること

である。この世は偽りと汚れと悪でいっぱいである。その中で私たちは、きよく、正しく、真実に生きる。その為にはどうしても聖霊の満たしという経験をすることが大切である。聖霊に満たされる時、聖霊が私たちをいつもきよい生活が出来るように導いてくださる。

(3) 救いの完成（将来）

さらに神の子とされたクリスチャンは、天を仰ぎ神を仰ぎ、将来を見つつ生きる。いつの日か必ず主キリストがこの地上に来てくださる。「キリストの再臨」である。その時、私たちの救いが完成する。確かに新しく生まれ変わって聖霊に満たされつつ、きよい、正しい生活をさせていただいている。それでもなお、小さい罪を犯したり、知らないで罪を犯している。その生活は完全ではない。しかし、キリストがもう一度、地上に来られる時には私たちは完全な者、霊のからだ、復活のからだ、栄光の姿に変えられる。主キリストの御姿に似る者に変えられる。何という感謝ぞ。私たちにはこの希望が輝いている。これこそ、私たちに与えられている救いである。

あかし

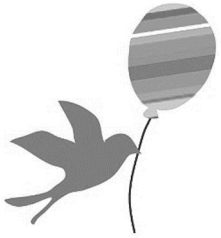
食前の祈り

平尾　洋子

2歳になる男の子のひ孫を日中、同居する娘が世話をしています。彼は私を「ばぁばぁ」と呼びます。一緒に遊んでやることは出来ないけれど、見ているだけで微笑ましい気持ちにさせてもらっています。

最近、彼は食前の祈りに手を合わせるようになりました。娘婿が一人一人孫たちの名前を挙げて祈るのにあわせ、最初は神妙に目をつむり指を組んでいます。しかし、次第にガチャガチャとお皿を突いてみたり、キョロキョロして遊び始めてしまいます。でも、はっと思い出して、また手を合わせるのです。そんな事を繰り返し、なんとか食べるのを我慢して、最後には「やれやれ、祈りが済んだ」と言わんばかりに、大きな声で「アーメン」と言います。何のために「アーメン」するのかも分からないだろうに…。と思うと可笑しくて。また、娘婿の肩車でトコトコと散歩に出かけると、道行く人たちに「かわいい、かわいい」と声をかけられるそうです。確かに、やんちゃだけど愛嬌がある顔立ちと、その言動で周りを楽しませてくれています。

そして、何より娘家族は皆クリスチャンで、ひ孫にもその信仰が自然に受け継がれていることに心から感謝しています。



神に恵まれた旅行

藤木　耐子

「41年間も父に会っていないけど一人ではどうしても故郷へ帰る気にはなれない」と、いつも世話をしてくれるマリアは言っていた。そんな彼女を私はどうしても連れて行きたくなり、夫の羔三を天に送った後、運転手のエリスマールと相談し、それを願っていました。マリアはためらっていましたが、「両親や兄弟姉妹が元気なうちに」という私の勧めを受け入れ、ようやく決心してくれました。

○導かれるままに

6月14日。故郷のキシェロ（セアラ州の首都フォルタレザから400キロメートル離れた田舎町）へ。フォルタレザの空港に到着後、車を借りて向かいましたが、誰に道を訊ねても「分からない」と言われ街をぐるぐると2時間も彷徨うことに。やっと行き当たったガソリンポストでオートバイ運転手が丁寧に教えてくれた。ハレルヤ！　15分ほど走った頃、その運転手が私たちの車に並走しながら「疲れているでしょうから我が家で食事をして休んでから行きなさい」と声をかけてくれました。お礼とお断りをした直後、道を間違いそうになる私たちを、彼はなおも半時間ほど大きな道路に出るまで案内してくれました。なんと感謝なことでしょう。

北へ北へと進み、すっかり日は沈み、喉が渇いて休憩に寄ったキシェロの隣町のガソリンポスト。なんと、そこでマリアの姪が働いていました。道順も彼女から聞くことができて感謝。

○涙の再会

家がぽつんぽつんとあるだけの暗い田舎道。迷い訊ねながらようやく到着。マリアの母、姉、その夫との喜びの再会に止まらない涙。そして次の日、

弟宅にいる99歳になるお父さんを訪ね、41年ぶりの再会を果たしました。そこでマリアは長年のお詫びをしましたが「分かるから」と、お父さんは抱きしめてくれたそうです。そして、頭に手を置き、祝福してくれました。滞在中は、兄弟たちから昔話や今の恵まれた生活などの話を伺ったり、お母さんと一緒に畑でとったバナナやマンジョッカ、アグア・デ・ココなどをいただいたり、聖書を読んだりと楽しく喜びあふれる日々でした。

そして、別れを惜しみつつフォルタレザへ。

○神の憐れみ

そこで更に余暇を過ごしていた翌日、「お父さんが入院した」という電話が入りました。4日後、サンパウロへ戻ったその翌日には、「亡くなった」という知らせを受けました。悲しい気持ちでいっぱいでしたが、「神様が両親との再会の機会を与えてくださり長年のお詫びも出来たし、お父さんに祝福もしてもらった。永遠に忘れられない大きな恵みと慰めだ」とのマリアの言葉に、私もエリスマールも神様に感謝しました。

「どうしても行かなければ」という願いからの一歩一歩は、導いてくださった神様の憐れみと大いなる恵みだったと感謝に耐えません。

祈りに応え給う主

宮谷　テル子

私はイエス様を信じて35年になります。5人の子供も洗礼を受け、サウーデ教会へ来ている娘達もいます。日本在住の長男家族は、埼玉県坂戸市のホーリネス教会(村上宣道師牧会)へ行っています。しかし、同じく日本に居る長女は教会へは行っていません。手紙を書く際は「出来たら行くように」と一言添えています。そして、その事を毎日、主に祈っています。苦しみや悩みの時、主に祈ることによって主がその祈りをきいてくださり、いつも傍で守り助けてくださいます。主を心から信じ、朝に祈り夜に祈り一日が終わる。感謝な毎日です。

ところで、今年から礼拝の司会をさせていただいておりますが、私は皆さんの前で話すのがとても苦手です。ですから司会のお話しをもらった時、「とても務まるわけがない」と、主に祈りました。そうしたら、『謙遜になって』という主の言葉が聴こえてきました。丹羽先生にそのことをお話したら「じゃあ、司会は大丈夫ですね。どんな奉仕をするにしても謙遜になるということはとても大事なことです」と、おっしゃられ背中を押された気がしました。その言葉を励みに「主のお手伝いが出来るなら」と喜んでお引き受けすることにしました。しかし、司会という大切な奉仕にためらう気持ちは今もあります。でも、必要な力と勇気を与えてくださいと祈りながら、『謙遜に』という御言葉を心がけ、教壇に上がらせていただいています。司会の度に心臓がドキドキして間違う時もありますが、皆さんどうぞお許しください。

そして、お祈りくださいますようお願いいたします。

⊙イエスさま日々の歩みの尊さよ

主の御許に

畠中　美恵子

昨年末に父が召されてから、ようやく母も元気を取り戻しつつあって、いつも通りの生活が送れるようになりました。そこで父を通し、神様から受けた恵みをお証しさせていただきます。

父は18歳の時、青森で特攻隊へ志願し、三千名余りの人達と共に、目隠しで汽車に乗せられ沖縄へ送られました。そこで張り付け部隊として陸上戦の最前線で戦っていましたが、ある時、腰に銃弾を受け本土へ戻され治療を受けることになりました。その間に部隊は全滅。三千名余りの中で生き残ったのはわずか6名。そのうちの一人が父でした。しかも治療先は広島でした。幸いにも山間だったので被爆することもなく、そのまま終戦を迎えました。ブラジルに渡った後も父は幾度となく大きな危機や困難に遭いましたが、その都度、助けられてきました。

「神様の御業に他ならない」と私は常々思って感謝していました。「父にもその神様の愛を伝えたい」と長年望んでいましたが、なかなか話す機会を得られないでいました。弱ってゆく父を想いながら、このまま伝えられずに見送らなければいけないのかと心が痛みました。「神様、父はあなたを知らずに死んでいっても良いのでしょうか」すがる思いで祈る日々に神様からの応答はないまま、最期の時を迎えてしまったのです。父が亡くなってから火葬場の安置所でその順番を待っていた時、主人が「安らかに天国へ行ってもらいたいから」と、火葬場専属のブラジル人牧師に祈ってもらうよう頼んでくれました。その牧師が祈るポルトガル語の意味はよく分かりませんでしたが、私や母、参列した皆も圧倒的な神様のご臨在を感じ泣いていました。そして、牧師は私たちに十字架を握らせ、「この方はクリスチャンではないと聞きましたが関係ありません。神様はただお一人です。この方は今、神様と一緒に行かれましたよ」と言ってくれました。「あぁ良かった。神様が天国へ連れて行ってくれたんだ」と確信し心の底から安堵しました。

神様は父の一生を面倒みてくださり、天国へも迎え入れてくださった。なんと恵まれた人生でしょうか。また、私の願いも最後の最期に最善にして応え、証しをたててくださったことに心からの喜びと感謝を神様におささげしています。これも偏にとりなしの祈りをささげてくださった皆様のお蔭です。深くお礼申し上げます。そして、いつも寄り添っていてくださる藤木姉、また励まし支えてくださっている丹羽先生と美香先生に心より感謝しております。

教会ではいつもイエス様のハナシ
でいっぱい。
あちらこちらから聞こえてくる
ステキなお証しをお届けします。

片山美枝子姉と鈴木弘子姉

私たちは15年来の友人です。最初の出会いは介護の仕事で日本へ行った時です。サンパウロへ戻ってからも、その時の同窓会で顔を合わせていましたが、思わぬところで再会しました。

鈴木姉／あれは水曜日の聖研祈祷会でしたね。片山さんが入って来られた時にはビックリしました。

片山さんは日本に居た頃から「教会へ行っている」と耳にしていたことを、ふっと思い出し「教会って、

キリスト教のことだったんだ」と分かりました。

片山姉／そうでしたね。私も驚きました。あれからお互いサウーデ教会で洗礼を受けて、今では会えば証し合ってますね。これまで健康に生かしてくださり感謝していますので、つい、そんな話になりますね。それに日々、いろいろあっても礼拝での御言葉に慰められますね。

鈴木姉／はい。私なんて御言葉いただかなくちゃ血圧が上がって動けなくなっちゃうわ。今は「他人の身になること」を学ばされています。そして、きついことを言ったりしていた昔を反省しています。でも私は信仰が浅いから、礼拝の時だけではなく、どんな時も御言葉で自分を守り、サタンに振り回されないでいたいけれど難しいですね。

片山姉／家でも聖書を読むと、一つ一つしっかりと魂に感じてきますね。苦労した日々が長くあったけれど、神様は私がどれだけ辛抱強いかを試してくださっていたんだと思います。すべては神様のご計画の中にあって、その間も守り支えていてくださったことに感謝しかありません。ですから、今では良いことだけを思い出しています。

鈴木姉／将来に不安を感じる夜は、祈ると「神様が私を知っておられる。お任せすれば悪いようにはなさらない」と慰められます。今日のメッセージをうかがって、これからは御言葉を聴いて実行できる者となれるよう神様にお従いしていきたと、ますます思わされました。

片山姉／本当ですね。また教会でお話ししましょうね。

阿部カルメン先生

この教壇横の活花を見てください。ユリの花がとても綺麗ですね。姿だけじゃなく、ほらこんなに香りも良いですよ。この鉢植えの葉っぱの模様も見てください。なんて神秘的なんでしょう。こちらの草花はこんなに小さいけど一つ一つ色も形も違うんですね。素晴らしいですね。まるで神様を賛美しているようでしょう。私は草花などの自然を見ると、「本当に神様のデザインは素晴らしいな」と感激してしまいます。

子供たちが遊んでいるのを見ても「神様の御業」を想い微笑ましくなります。みんな神様のご栄光を表わしているみたいで、私も嬉しさと喜びでいっぱいになります。

詩

「花」

八木重吉

花はなぜうつくしいか
ひとすじの気持ちで咲いているからだ

「一瞬の美しさ」

水野源三

目をはなさないで
じっと見つめていよう
すぐに消える一瞬の美しさを
夕日にきらきら光る
軒先に下がったつららの
すぐに消える一瞬の美しさ
御神の御わざなる
すぐに消える一瞬の美しさ

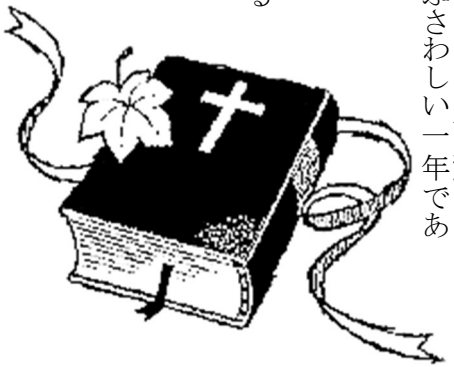
みことばの小箱

年初めにいただいた御言葉は何でしたか？

中山輝子姉　　ローマ　12章　13節

あなたがたは
すべての人と平和に暮らしなさい。

※すべてにおいてこの御言葉にふさわしい一年であるように、との気持ちで過ごしています。気になることがあっても御言葉を思い出し、ぐっと抑えることもあり、いつも心に置いています。



喜納光枝姉　　詩篇　81篇　10節

あなたの口を大きくあけよ。
わたしがそれを満たそう。

※いただいた御言葉を見て、すぐに示されたことがありました。普段、祈る時は心の中でしていましたが、御言葉にあるように、口をあけて祈るようにと示されました。それから、口をあけ声に出して祈るようにすると、祈りたいことがどんどん出てくるようになりました。心の中だけだと祈りの想いが逸れてしまい、余計な事を考えてしまうけれど、声に出すと集中して祈れます。そのお蔭か、祈りが神様にきかれていると感じることが多くなりました。感謝です。

短歌

◉　子の為とひたに尽くしし父なりき
　　在りし日顕ちくる敬老の日

崎山美知子姉

この時期は、在りし日の父を思い出し胸があつくなります。8月の父の日には、常に子供のことを考え尽くしてくれたことを感謝して。そして敬老の日。父は80歳を過ぎて九州へ墓参りする為、帰国しましたが、証しを頼まれあちこちの教会を回っていました。その道中、脳溢血で倒れ、そのまま召されてゆきました。そんな姿を想って、最期まで証し人として立った父に改めて尊敬の念を抱いています。

キリストかおる童謡

『赤い靴』

作詞／野口雨情
作曲／本居長世

一、赤い靴　はいてた　女の子
　　異人さんに連れられて　行っちゃった
二、横浜の埠頭から　汽船にのって
　　異人さんにつれられて　行っちゃった
三、今では　青い目に　なっちゃって
　　異人さんのお国に　いるんだろ
四、赤い靴　見るたび　考える
　　異人さんに逢うたび　考える

この詩のモデルとなったのは岩崎きみちゃん。母親の『かよ』は、幼子を連れ静岡から北海道へ渡り、そこで再婚。開拓農場へ入植しますが、労働の厳しさと貧困に喘ぐかよ夫婦を見かねたアメリカ人宣教師のチャールズ・ヒューエット夫妻は「きみを養女に」と申し入れます。『かよ』は感謝しつつ夫妻に預けました。その後、アメリカで幸せに暮らしているだろう娘を想い、隣家に住む野口雨情に身の上話として聞かせ、雨情はその話にイメージを膨らませ作詞したといいます。しかし、事実は少し違っていました。『きみ』が6歳の時、ヒューエット夫妻に帰国命令が出ましたが、『きみ』の身体は既に結核に侵されていて、長い船旅に絶えられる状態ではなく、夫妻は泣く泣く孤児院に彼女を託して帰国します。『きみ』は9歳で短い生涯を終えました。

『かよ』は知るよしもなく、後に宣教師夫妻との出会いをきっかけにクリスチャンになったそうです。

◉日本の音楽界に貢献した宣教師達

1859年に横浜や長崎の港が開港し、プロテスタント宣教師が来日。彼らは当時キリシタン禁制下の元、迫害に耐えながら命がけで宣教しました。伝道の他に教育・音楽・医療などの様々な分野で日本の近代化にも貢献しました。また、伝道に積極的に音楽を用いて讃美歌とリードオルガンを教会や学校に広めました。日本の西洋音楽の土台を築いた作曲家たちの多くが若い頃に宣教師からオルガンや楽器を習い基礎を学んでいます。本居長世も通っていたドイツ系の学校で外国人教師から指導を受けたのをきっかけに作曲家の道へ進みました。

長谷川美代枝

個人消息

＊召天者

臼井美恵姉　（享年94歳）
2016年　6月　5日

浅井津哉子姉　（享年84歳）
2016年　6月12日

中山美智子姉　（享年88歳）
2016年　6月19日

ご遺族の上に主の豊かなお慰めがありますようお祈りいたします。

おしらせ

＊工藤篤子コンサート（サンパウロ）

伝道師として音楽で神の愛や希望、癒しを伝えるドイツ在住の日本人ソプラノ歌手。

ブラジル各地でコンサートを開催します。

◎主催／ブラジル日系キリスト教連盟

◎日時／10月1日（土曜）　午後3時～

◎会場／文協　大講堂

◎入場／無料ですが、腐らない食品（油や米など）1キロのご寄付をお願いします。それらは、文協関連の福祉機関へ寄贈されます。

＊賛美セミナー／　工藤さんを招いての学びです。

◎日時／10月3日（月曜）　午前と午後

◎会場／ホーリネス教団　リベルダーデ教会

※　あとがき　※

リオ五輪も感動と共に無事、閉会しましたね。大健闘する選手をテレビ越しに称えつつ、ふと、この世で勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通し、主から義の栄冠を」と、祈らされました。　Ⅱテモテ4:7～8　（おばら）

◇ http://saudekyoukai.jimdo.com/　◇ Facebookで、礼拝メッセージ動画がご覧になれます。